
特脳研

こうろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特脳研

【Nコード】

N6818S

【作者名】

こうろ

【あらすじ】

能力者で構成されている特脳研に所属している青年が煩惱と能力を使って自分の生活を精一杯生きる物語。

一話(1)

特殊能力保持者研究所兼特殊脳力開発所、通称＜特脳研＞。

良くも悪くも大きな影響力を持つやつら、一般的に超能力者と呼ばれる存在を管理するために政府が立ち上げた能力者による能力者の施設。

おとといA Vコーナーに堂々と入れるようになった俺、たかみねいくと高峰郁人もこの特脳研に所属している。より正確にいうならば、飼われていると言ったほうが正しい。政府は能力を制御するために特脳研に所属している全ての能力者の脳内に極小の電子チップを埋め込んだ。

このチップのせいで能力者は能力をフル稼働することができなくなった。

能力者である俺も例にもれず、頭の中にはチップが埋め込んである。まあGPS機能が付いてないだけかもしれない。

もしそんなものが付いていたら、プライバシーなんてあったもんじやない。

ようするに、このチップはプライバシーの権利をある程度守りながらも、能力者の抑制も兼ねている技術班曰く世紀の発明なのだそうだ。

しかし今、その自称世紀の大発明である極小電子チップが壊れた。技術班の連中はただの誤作動だと言い張っているが、俺にとってはそんなことどちらでもいい。

重要なのは、今俺を含め全ての能力者の束縛が解けたということだ。班員の全てが老若男女関係なく戦闘狂で占められている鎮圧班や戦闘班のやつらはすでに脳内麻薬をガンガン分泌し始めていて、手が

付けられなくなっている。

バトルジャンキーの巣窟と化した特脳研A館から漏れ出ている怒声、悲鳴、笑い声は俺がいる特脳研B館まで届き、その場の惨状を強制的に脳内に浮かび上がらせる。

こんな時は、自分の能力が非戦闘向きで心底よかったと思える。

今俺がA館に入ったら3秒で死ぬ。

間違いなく死ぬ。

そんなA館とは対照的にこっちのB館では目に見えない戦いが繰り広げられていた。

誰もが自分の仕事机にはりついてパソコンの画面に顔を向けたままあちこちに視線を向けていた。

B館にいるのは俺のような非戦闘系の能力者ばかり、似たような能力者もたくさんいるし、お互いの能力や妨害方法も熟知してるために、うかつに動く危険なため牽制し合っている。

俺を除いて、だがな。

特脳研に入ってからはや十年、俺はまともに能力を使ったことがなかった。

いや、使えなかった。

俺の能力はどうやら強すぎるようでチップの抑制率を大幅に上げられていたし、お偉いさん方のいろいろな事情もあったそうだ。

俺の能力を知ってるお偉いさん方はここには居ないし、唯一俺の能力を知られている上司はこのあいだ戦闘班に移動した。

つまりこの場にいるやつは誰一人として俺の能力を知らない。

これから起こることを想像するだけで口角が自然と持ち上がる。

俺無双の始まりだ。終わった後が怖いが、このチャンスを逃すわけにはいかない。

まずはターゲットの選択だ。先週新人研修を卒業した安田さん、二十代前半で彼氏はなし。

可愛い顔立ちをした人で年上なのに妹のような雰囲気を持つ女性だ。能力は透視系だと言っていた。

手始めに彼女から行こう。

どちらかというとまじめな性格の彼女に能力を使うことには多少の罪恶感を覚えないこともないが、そこは十代後半の男子特有のあふれ出るほどの性欲、飽くなきエロスへの探求心によって思考の片隅に追いやられた。

顔がにやけるのを全力で阻止しつつ、安田さんに視線だけを向け集中し始める。

しばらくすると安田さんの頭上に彼女の個人情報that浮かび上がった。本名…安田かおり、年齢…22、身長…152cm、家族構成…父、母、姉、妹、恋人…過去二人、現在なし、ほかに体重や学歴、住所などの項目がまだまだあるが省略。

プライバシーの権利を蹂躪しまくってるが、ここまでしか相手の情報を得られない能力ならばそこまで強い制限はかけられないはずだ。いやこれでも十分えげつない能力だと思うけれども、この能力の真骨頂は別にある。

たくさんある項目の一つに記憶というものがある。

大体想像はつくであろう、ターゲットの人生をターゲット視点で見れるというなんとも鬼畜な機能がこの能力の本領だ。さすがにその

時の本人の思考は読めないが。

恐ろしい、我が能力ながら恐ろしい。この能力の持ち主が俺でほんとうによかったと思う。

プライバシーという言葉自体をぶち壊してしまうこの能力。

この能力の前にはプライベートは消失する。具体例を出せば青少年が深夜に励む一人遊びが本人目線で目撃できるのだ。

想像するだけで鳥肌が立つようなおぞましい情景だが、対象が可憐な女性ならどうだろうか。

今から俺が安田さんにするのはそういうことだ。

自分ながら最低だと思う。しかし偉い人は言いました、犯罪は発覚しなければ犯罪ではない、と。

俺の変態行為もばれなければ全てが許されるわけだ。

ごめんよ、安田さん。

しかしまあ、ここまで人知を超えた能力にはリスクを伴うのが当然で、この能力にも副作用と呼ばれるものが存在する。

ターゲットの個人情報を表示するだけでも多少の副作用があるし、記憶を覗こうとするなら古い記憶ほど強力な副作用が襲ってくる。

だが、いまは一日前の記憶が覗き見できればそれでいい。

安田さんは今恋人はいないし、若いから性欲を持て余しているはずだ、きっと。

それに女性の性欲は男性のその四倍はあるというし、毎晩一人遊びをしているはずだ、おそらく。

むしろ、そうであってほしい、そうでなくては困るのだ。

副作用という多大なリスクを甘んじて受け入れる覚悟はできたが、得られるものがなかったならば死んでも死にきれないというものだ。

……いやまてよ、誰もが一日に一回は風呂に入るのではなからうか。
安田さんがノー風呂派というマイノリティでないかぎり、最悪彼女の
生まれたままの姿を拝めるはずだ。

さて、ここらで始めるとしよう。欲望に忠実に。俺は神になる。

一話(2)

俺のエロスへの情熱が昂ぶっていくのに比例して、副作用の魔の手が伸びてきた。

下腹部の違和感が無視できるレベルではなくなり、すべてを解き放ちたいという欲望が脳内を順調に占めつつある。

便意。人間が生きていくうえで避けることのできない行為を引き起こす感覚。本屋に行くときよくなる現象。それが俺の副作用の正体だ。正確には、能力を使うと副交感神経を刺激され括約筋が弛緩するとかどうとか研究者の連中は言っていた。

ようするに、俺の副作用は下手をすると社会的に抹殺されかねないものののだ。近くにトイレがない状態で副作用が生じた時を想像するだけで恐ろしくてたまらない。

一度、社会的に抹殺されかけたが、そんなことはどうでもいい。

今はただ、安田さんの全てを見ることに集中しなければならない。しかし、現実とは残酷なもので排出欲が占める脳内の割合はすでに五割を突破している。

貧乏ゆすりや深呼吸をして気分を紛らわしているが、無駄なあがきにしかすぎず、限界が見え始めている。

あと少しでいい、ほんの少しでいいんだ。

一目でいいから見せてくれ。

頼む、耐えてくれ俺の括約筋。

お願いだ。

ああ……、もう……。

……あっ！

結果から言わせてもらおうと、大変ご馳走様でした、というわけだ。

迫りくる便意に恐れながらも、欲望を追い求めた俺は能力を使い続

け、安田さんの丸裸の肢体をとうとう発見した。

俺は一瞬でその光景を脳内に保存、保護を行い、今いる男子トイレの個室まで、最短距離を通ってたどり着き、脳内の八割を占めていた欲求を解放し、今に至る。

「……ふう」

つい口からため息が漏れる。

不自然な姿勢でここまで来たため、もしかしたら能力を使っていたことが誰かにばれたかもしれない。少なくとも怪しまれてはいるだろう。

ただ、戦利品のことを考えたら、そんなことは些細なものだ。

安田さん、着やせするタイプなんだな。見た感じちっぱいだったのに、現実には掴めるぐらいのボリュームがあった。

「……うひひひひ」

網膜に焼き付けた映像の余韻に浸っていると、個室のドアが勢いよく叩かれる。

「おい、ごらあ！！出て来い！とぉ！！ここにるのはわかってんだぞ！！」

男子トイレでは聞こえるはずのない女性の怒号。その声は俺がよく知っている声だった。

「ウソだろ！？な、なんで流子^{りゅうこ}さんがここに！？」

その声の持ち主は、数少ない俺の能力を知っている人間であり、幼いころからの顔なじみであり、俺が絶対に逆らえない人の一人だ。

「うるせえっ！！いいからでてくりゃいいんだよ！！」

質問には答えてもらえず、ドアをたたく力はどんどん強まる。

てか、もうこれノックじゃなくてドア蹴ってるよね。間違いなく蹴ってるよね。ドアみしみし言ってるし。

とりあえず今は、早く個室からでなければならぬ。流子さんの要求は理不尽だが、俺には彼女に逆らうという選択肢は用意されていないのだ。

「い、今出ます」

個室から出てきた俺を待ち構えていたのは、やっぱり流子さんであった。

腰まで伸ばした輝くブロンドの髪、モデル並みのスタイルを持ち、シックな黒のスーツに包まれた美人は明らかに怒っていた。

その矛先は間違いなく俺だろう。今にも殴りかかってきそうだ。なぜ流子さんが腹を立てているのかはわからないが、ここは慎重にならなければ。

とりあえず先手を打とう。

「あのー、俺に何かよ」

「郁人、おまえ………つかったな」

その一言で俺はすべてを理解した。ばれた。ばれたばれたばれた。ばれてしまったのだ。脳内で過去に流子さんから受けたしつけ、説教という名の暴行の数々が走馬灯のように流れゆく。動悸が激しくなり、体が勝手に震えだす。いかん、落ち着け、落ち着くんだ俺。動揺するな。まだ何とかなるはずだ。いけるぞ。

「え？何のことですか流子さん」

ちょっと白々しいかもしれないが、声も震えてないし、落ち着いてる感じは十分出てるはずだ。
諦めるな俺。頑張るんだ。

一話(3)

「あははっ、まったく流子さんたら何を言ってるんです？俺が何を使ったって言うんですか。そんなことよりもここ男子トイレですよ？わかってます？」

とりあえず、ここ出ませんか？」

「……」

流子さんからの返事はなく、動く気配は感じられない。腕を組み、仁王立ちした流子さんは威圧感を放ち続け、ただひたすらに俺のことを睨みつけている。その瞳に宿る激情の炎はそう簡単には消えそうもない。

男子トイレは、今非常に緊迫した空気に包まれていた。

その雰囲気にあてられて、つばを飲み込む。口の中はカラッカラに乾いていた。

どうしよう、本当にどうしよう。なんとかごまかしたいけど、流子さんが何か喋ってくれないと話が進まないし。そもそもなんで流子さんがあんなに怒っているのかわかんないし。あー、もう本当にどうしよう……。うしろ……。

「……………土下座」

流子さんはたった一言、それだけ言うのと再び口を閉ざした。その声には、どす黒い感情が嫌というほどこめられていた。

おそらく、流子さんには俺が能力を使ったことがばれているのは確実だ。なぜかは知らないが。

だが、上手い言い訳があれば流子さんの怒りも多少は鎮まるだろう。今日は、せっかく安田さんのヌードという素晴らしいものを手に入れたのだから、いい一日で終わらせたい。考えろ、考えるんだ。この瞬間にすべてがかかっているんだ。とりあえず今は時間を稼がなければ。

「い、いやいやいや、何言ってるんですか。それにここトイレですよ」

そう、ここはトイレだ。こんな小便が飛び散ってるようなところで土下座するのはごめんだ。

流子さんはそんな俺の答えが気に入らなかったのだろう。眉間のしわがさらに濃くなる。そして、組んでいた腕を解き、片腕を突き出すように俺に向けた。

「い・い・か・げ・ん・に・し・ろ」

流子さんは、声を腹の底からひねり出すようにそう言った。その瞬間、俺の体は指一本たりとも動かすことができなくなった。声を発することすらできない。流子さんの能力だ。詳しいことは教えてくれなかったが、強力な念動力だと言っていた。俺の能力のことは無理やり全部聞き出したくせに、自分のことはほとんど話さない。流子さんは本当に理不尽だ。

何かに締め付けられているように、俺の体にかかる圧力が強まった。

流子さんがゆっくりと口を開いた。気分はまるで死刑宣告を受ける犯罪者だ。

「あのな、私は全部知ってるんだぞ、お前が能力を使ったことも、何のために使ったのかも。だから、あんなに私は怒っていたんだ。でもな、お前の気持ちもわからないことはない。普段は制御されていて使えないものが何の制限もなく使い放題なんだ。そりゃ使いたくなるさ。

うん、わかるよ」

流子さんの表情が柔らかいものに変わり、諭すような口調に加えて、体を圧迫する力も弱まった。

もしかしたらこれは助かるかもしれない。希望が見えてきたぞ。

しかし、そんな希望を叩き潰すかのように表情を険しくさせて流子さんは続けた。

「だがなあ郁人よ。わたしが許せないのはその目的だ。

別に何に使おうとお前の勝手だ、でもな、お前女の子に使ったろ」

再び声が怒気をはらんだもの変わった。
うん、詰んだねこれは。完全にばれてやがる。言い訳がどうかそんな問題じゃない。どうしようもねえなこりゃ。

「あたしいったよな、お前が能力を教えてくれたとき」

教えたんじゃないくて無理やり聞き出したんだろ、と言ってやりたいが残念ながら今の俺に発言権はない。

俺が何を考えているかなんて関係なく、流子さんは話し続ける。

「女の子にこの能力使ったら許さねえって言ったよな。なあおい、言ったよな?……返事しろゴラア!!」

ぐにええ。

流子さんの怒声に反応するように弱まっていた圧力が急激に強まる。体がみしみしと悲鳴を上げているのが聞こえる。

返事なんかできるわけないってーのに、自分の能力なんだからわかってんだろ!って言えたらどんなに気持ちいいだろうか。いつか絶対と言ってやる。ついでに乳ももんでやる。絶対にだ。

「はあ、とりあえず土下座しろ。それでわたしは許してやる」

流子さんの能力が解除され、体の支配権が俺に戻る。今何か言っても逆効果にしかないだろう。そしてここで土下座をすれば全てが終わる。
やるしかないのか。

「あ、あのーここで土下座はちょっとあれかなって思うんですけどー」

「やれ」

「いやでもー」

「やれ」

「い」

「やれ」

あがくことすら許されないようだ。

仕方がない、やるしかないのだ。

ゆっくりとひざまずいて、手を床に着けた。

ひんやりとしていた床に一瞬でも気持ちいいと思ってしまった自分が恨めしい。

そして頭を下げその状態を維持する。

「よし、いいぞ」

土下座体勢を維持すること数分、流子さんの許しが出たようなので顔を上げる。

ようやく終わった。

早く手を洗って帰ろう。そして今夜はじっくり戦利品を堪能しよう。

そんな浮ついたことを考えていた俺の視界に映ったのは、未だ怒りおさまらずといった顔の流子さんだった。

「えっと、あれ？許してくれたんです、よね？」

流子さんはハイヒールをカツカツと鳴らし無言で近寄ってくる。

え？え？なんで？

頭の中が疑問で埋め尽くされる。

「ああ、許したよ。……あたしはな。これはお前が能力を使った子の分だ」

そう言うとき流子さんはこぶしを握りしめ大きく振りかぶった。
いつの間にか能力を使われていたようで、体が動かない。

ちつくしう。

流子さんのすつごく嬉しそうな笑顔を見た瞬間、俺の意識は吹き飛ばされた。

一話(4)

「あ、高峰君。君、今日から戦闘班に配属されたから。A館行ってね。

じゃ、そういうことでよろしく」

流子さんに気絶させられた翌日。いつもとおなじように特脳研B館に入った俺に、受付のおっさんはそう告げた。

「……え？は？ちょ、ちょっと待ってくださいよ！なんでそんなことに！？」

「いや、なんでって聞かれてもねえ。上が決めたことだからね。まあ、そういうことだから。君の私物は全部A館のほうに移されてるからね。うん、がんばってよ」

突然の出来事に混乱している俺を放置し、もういうことは何もないと言わんばかりに、おっさんは手元のモニターに目線を落とした。

戦闘班。その名の通り敵と戦い、叩き潰すための班。所属している奴らはどいつもこいつも戦闘系の能力者ばかり、流子さんも戦闘班だ。主な職務は能力者の犯罪者をぶちのめすこと。基本的に戦闘狂しかいない。というよりもそうでなければやっていけない。戦闘班とは、そんな化け物どもの魔窟なのだ。

能力は戦闘向きとは言えないし、腕力も知力も人並み。そんな俺をあの狂人どもの中に放り込むなんて正気じゃない。なにより、戦闘班の人間として役に立つわけがない。

とにかく、ここにいてもどうしようもない。とりあえずA館に行かなければ。

B館から歩くこと五分、A館に到着。昨日の騒ぎとは打って変わって、目の前にあるA館は静まり返っていた。自動ドアを通り中に入る。待ち受けていたのは、無人の待ち受けカウンターだった。昨日あれだけの戦闘があったにもかかわらず、内装が壊れているところは見当たらない。便利な能力者がいるのだろう。無人の理由はわからないが、案内板で戦闘班の部屋を確認すると、そこに向かった。

目の前にあるのは赤のペンキで『戦闘班』と書かれた金属製のドア。ドアノブは不自然に凹凸がついていた。部屋の中から人の気配はしない。

……勝手に開けてもいいのだろうか。いや、もしも中に誰かいたらどうなる？ここは戦闘班だ。その誰かは十中八九バトルジャンキーだろう。失礼な奴に殴ってもいい奴、と判断されて襲われかねない。常識的に考えれば、そんなことはありえないが、A館の住人達には常識なんてあつてないようなものだ。流子さんに言わせると、『常識なんてわたしには必要ない、なぜならわたしの能力の前ではそんなものの意味はないからだ!!』だそうだ。そういうわけで軽くドアをノックした後、ドアノブをひねる。

ガチャリ、と硬質の音が廊下に響いた。

……おい、ふざけんなよ。このやろう。俺何しにここまで来たんだよ。

……帰るか。うん、そうだ帰ろう。誰もいないんだからしようがない。うん、俺に責任はない。帰って、飯食って、テレビ見て、ゲームして、出すもん出して寝よう。そうしよう。

決意が固まったところで、ドアに背を向けエレベーターに向かって歩き出そうとした。しかし、俺の動きは振り返った瞬間に止まった。エレベーターからよく知っている女性が出てきたのだ。というより流子さんだ。昨日、俺が能力を有効活用しただけで全力でぶん殴っ

た悪魔だ。

「おう、郁人。ここにいたのか」

昨日あんな仕打ちを俺にしたにも関わらず、流子さんは何事もなかったかのように話しかけてきた。

今日も流子さんは黒のスーツを着ている。相変わらずいい体だと思う。さすがハーフというべきか。腰の位置から違うのだ。まあ、何よりも素晴らしいのは、手でつかみきれないほどデカイおっぱいなんだがな。流子さんがなにか喋っているが、すべて聞き流して、流子さんの体を視姦し続ける。普段から理不尽の嵐にさらされ続けているのだ、これぐらいの自由があって当然じゃないか。

「——ってわけで、これからわたしの部下、もとい下僕になるわけだが」

……ちょっと聞き流せない単語が聞こえたぞ。誰が誰の部下だって？俺が？流子さんの？嘘だろ！？班が違った今まででさえ、なんだかんだ言って顔合わせることも多くて散々悲惨な目にあってきたっていうのに、今度は部下だと！？四六時中一緒にいることになるじゃないか！？

絶望に打ちひしがれてる俺とは対照的に、楽しくてたまらないという表情の流子さん。

ちつくしよ、ついつい見とれちまうような笑顔だぜ。美人は特だな、ほんとに。

「ま、そういうわけだから。ほら、ついてこい」

流子さんは俺の横を通り、ドアの前に立つとドアノブをがしつと握った。

「ふんっ！」

掛け声とともに流子さんは強引にドアノブを回した。バギヤツつという音とともにドアが開く。

壊しやがった。ドアノブのへこみはこれのせいか。

流子さんはずんずんと中に進んでいくため、あわてて追いかける。

戦鬪班の部屋は今まで俺がいたところとは、大きく異なっていた。

B館では、基本的に頭脳労働であるため、オフィスデスクが並んでいるだけであったが、ここは大きなソファやテレビ、ゲーム機、ドリンクバーに各種雑誌など完全に娯楽目的の部屋となっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818s/>

特脳研

2011年10月9日00時28分発行